せんデ腹心臣の家来三名を從へて密かに淀川堤へ赴き浦鉾小屋を一々捜ねて見ると確かに當りが付いた併し日の昼間仕事をするのも宜しくないと夕景に相成るのを待つて居る、其中に日はドップリ暮れましたから密と母子の住居う處の浦鉾小屋を覗ごうに

源吾「楓さま〳〵……」楓「ヲヤッ……」と源之助は居ない樣子だ思つたが今時分自分の名を呼ぶ者はない筈又楓抔と名を知つて居る者も無い筈だと思つたから駄つて居たスルと又鷹張の外で源吾「楓さま〳〵……」源吾でした座います弟の源吾がお尋ねヤしました楓も扨はと思つたが源吾と云へば根が宜しくない奴如何なる難題を言ひに來たか知れないと思つたが源吾と名乘られて見れば正逆に返事をしない譯にも往ない　楓「ハイ何方樣かと思つたら源吾さまですかお恥かしい此姿……　源「イヤ〳〵お拝ひ下さいますな……シテ源之助殿は何處へお出でになりましたかゆ

留守の樣子で淋座います　楓「ハイ一寸天神へ參詣に參りました　源吾「夫は〳〵淋神心な事で……時に俺しの今晩伺つたのは實は折入つての淋願があつての事　楓「何か淋用で淋座いますか　源吾「イヤ〳〵別に太した事ではありませんが淋存じの通り貴女方が立退きになつてから石川典膳樣は何うぱ考へがあつたものか佐々木の家名を斷絶させるのも惜しいもんだと私しに其儘下さる樣になりました　楓「之は又思ひも寄らぬ事を仰せられます私し等母子は、飛んだ災難で着のみ着の儘立退きましたから別段夫樣ものは存じませんが夫に斯ういふ有樣になつてはソンナ品があつた處で何にも俺等の役にも立たず夫れを持參いたして居る抔のお疑ひマア大それた事を仰しやいますな……と丸の名劔アノ二品がなくては城に先祖へ對しても相濟まぬ幾何卒那の二品をお渡し下さいまし　楓「之は又思ひも寄らぬ事を仰せられます私し等母子は、飛んだ災難で着のみ着の儘立退きましたから別段夫樣ものは存じませんが夫に斯ういふ有樣になつてはソンナ品があつた處で何にも俺等の役にも立たず夫れを持參いたして居る抔のお疑ひマア大それた事を仰しやいますな……と

ポーンと刎ね付けられた　源吾「夫でも飽までは存じはありませんな　楓「如何にも存じませんで御座います　源吾「夫れじゃァ之れ程御願みしても御包みあればモー嫌ところない……と突然楓を突飛ばして懷中へ手を差し入れたが實は常に秘藏して居る事故コナリと手ざはりが致したものがあります　源吾「ウム之だ　源吾「慥かに之は家の系圖と懷中へ押し入れんとするを　楓「夫を遣つては大望の妨げ俺れ大悪無道の源吾奴と武者振り付いて懸る故　源吾「エー何を小癪な小面倒なりと拔討に斬付た　楓「アッ……と云ひて倒れる處を再び左りの肩先深く斬り込んだから楓はパッタリ其處へ俯伏に相成つた源吾は止めを刺そうとすると折しも向ふから提灯の火影が見えたゆへ見つけられては成らんと血刀をぬぐつて一目散に蒐け出したが三人の家來も續いて其處を逃げ去つた暫

らく致すと源之助はイキセキ歸つて來て吃驚仰天し　源「コヘ何者の仕業なるかと暫し茫然として居たが泣くに涙も出ばこそ母の死骸へ取縋つて　源「母人……ハ……母人イノー……と二聲三聲呼び生ると女ながらも氣丈の手負ひ　母「ヲ……ヲー……源之助か遲かつた〳〵……大悪人の源吾が日の暮れ際に此處へ來て家の系圖を渡せといふ無理無體知らぬと云へば懷中へ手を入れて無理往生に奪い去らうと致すゆへソレを遣つては迫ひ縋がれば〳〵情ない此始末敵といふはアノ源吾奴今に思ひ知らして呉れう……と其儘息は絶々に相成つた　源「母人……氣を確かに……と幾ら呼びても叫びてもモー今度は仕樣がない……ワッと斗りに源之助は死骸に取縋り男泣きに泣いて居ましたが同じ袖乞仲間でも情に變はないものかドヤ〳〵と見舞に來て呉れたが驚れも此始末に驚いた故　×「何も後も約束事ソー嘆い

ても仕方がない　○大きに肥前が云ふ通りだ泣いたって生きて返る譯じゃアなしマア〳〵後々が大事だからと親切に慰めて呉れますゆへ源之助も漸く涙を抑せ　源「皆様の御親切は有難うゴ座いますモー決して嘆きませんハイ有難う御座いますと是から大勢寄って集って死骸をば近所の寺へと葬った

第六席

お咄し變って此處に攝州長柄の長者といはれたる濱野の左衛門と云ふ名代の長者があった左衛門は男の子といふものがない娘二人に梅ヶ枝櫻木といって姉は十八妹は十六實に氣量は絶世の美姉人……處が姉の梅ヶ枝といふのは大層鶯が好で物心が付いてからは唐琴といふ鶯を手飼にいたし夫を樂んで居る唐琴も大層好く馴れて居るから小鳥ながらも梅ヶ枝の云なりになる或日の事妹の櫻木と共に供の久造と腰元のお花にお春といふ極くお氣に入りの二人を連れて北野の天神へと參詣いたした　姉「櫻木や今日はお天氣は好しするから連れて來た唐琴を籠から出して遊ばせて遣らうではないか　妹「夫れが宜しう御座いましやう……お春や唐琴を此方へ連れてお出で」お春は籠のまゝ其處へ出すと姉の梅ヶ枝は籠を開いて唐琴を遊ばせて遣うと例日の通りに何か云ひ乍ら其處へ置きました唐琴は嬉し氣に籠を出で那方此方を飛び廻って來ますが不圖飛び去って姿が見えなくなって仕舞った　姉「アレ唐琴が……いふ間もなく跡を追ひ懸けたが小鳥乍らも飛ぶ方が早いや影も形も見えません腰元共も供の久造も心配して那方此方を尋ねて歩行き姉妹も狂氣の如くに尋ねて歩行ぐと向ふから來た一人の非人竹の杖の先きへ鶯を止めて梅ヶ枝の傍へと參りました　非人「之は何方さまか存じませんが鶯は確し

か貴女方の仇手飼只今私しの杖の先きへと飛んで參りましたから浮連れヤして參りました　姉「之れは〳〵誠に恐れ入りました唯今遊ばせて遣らうと籠を出すとイッにない飛んで往て姿も見ませんでしたが貴郎樣のお影で漸く安心いたしました有難う御座いますと云ひ乍ら一寸此非人の樣子を見たところ姿ところヲンボロ〳〵の乞食ですが顏形ちなら氣量なら目鼻立から口元まで實に當世の好男子だ梅ケ枝は今までは嬉しい一心で色々と曉舌ては居たけれど不圖戀風が身に染みてかッと顏に紅をさし下俯向いて跡は言葉もない非人も手持ち無沙汰で　非人「夫では確かにお渡しヤしましたと歸らうとするから梅ケ枝は氣が氣とヤア無いらしいが正逆人目があるのに乞食の袖に縋る譯にも往かないゆへ　姉「花や何かお禮を……最前から梅ケ枝の傍に居た腰元のお花は懷中から幾らかのお鳥目を出して非人に遣つた

之はホンのお禮の印し何かお取なすつて下さいまし　非人「イヤ〳〵斯いふ浮心配を願はうと思つてお連れヤした譯じヤア浮座いませんと確かく辭退をすると云ふのは非人に稱なる擧動である併し達てと云ふものですから貰はなかつたら如何なものだから　非人「夫れでは折角のお志し頂戴いたしますと押し戴き立退らうとする梅ケ枝は心惜し氣に跡を見送りボンヤリ立つて見送つて居るから　花「お嬢さま如何遊ばしましたモー今日は之れで歸ります事に致しましやう　姉「左樣かへ夫れじやア返る事にしやうかねエ、と一同連れ立つて返つて來たが扨梅ケ枝は此時より〳〵病いに相成つた一体此梅ケ枝姉妹と云ふして枕に付きブラものは幼き時に母に別れ現在の母のお部といふのは實は繼母で浮座います夫れ故參り二人の娘の面倒も善く見ない、ものだから今梅ケ枝が床に臥つて居つても左して心配もしないらしい併し

し父の左衛門は親身の娘であるから大層に楽としてお花といふ永年奉公して居る腰元を呼んで梅ヶ枝の様子を尋ねると實は北野の天神へ參詣のせつ何やら非人に思ひあり氣の素振りであつたといふ事を咄したから左衛門も　左「夫れでは内々人を以つて捜さして見やうと孰れの親も子の可愛いくないものはない増して左衛門は母親が継しき中であるから猶更心配して密かに非人の有家を探すといふ畢竟此非人といふは何者であるか次席に於て辨じます……

第七席

百八十四

復者諸君も既に存じでゆ座いましやう彼の非人といふのは即ち佐々木源之助が成れの果にて丁度母楓が源吾の爲めに殺された其日に天神へ參詣に參つたときのお咄しであります長柄の長者左衛門は人を遣つて密かに非人の行衛を尋ねた處が漸々の事で解つた夫れは淀川縁に居る奥州といふ字のある非人だと確かに突き止めたッコで心利いたる手代の松山作左衛門といふものに人知れず左衛門よりして頼みまして是非共彼の非人を姉梅ヶ枝の婿としたいアノ分で置けば屹度命はないものに極つて居るとあらば非人でも何でも娘の心に任せるのが專一だと親の心を察したる作左衛門・作「宜しう座います其有家さへ解つて居りさへすれば何よりお安い用承知いたしまして座います左「夫では何分頼みましたぞ……之から作左衛門は彼の非人なる源之助に此縁談を持ち込むと源之助は只管辞退する併し作左衛門も受け込んだ事だし殊には人間一人の命にも係はる事だから此義を篤と入れた源之助も暫らく考へて　源「夫いふ譯で座いますれば非人の義も承知故心に任せて宜しく取計ら

ひを頼びます　作「イヤ早速の承知辱なし然らば何は兎もあれ俺の家まで來て一切の支度を調へるが宜からうと之から作左衛門は源之助を我家へ連れて參り湯に入れるやら髪を結はせるやらして立派な着物を着せました處が根が武家育ちでゆ座います　作「ナル程之やア梅ケ枝様の戀病をするのも無理はないわい……により實に見上たる品格が備はて居る作左衛門は心中に考へた夫より作左衛門の周旋を以つて首尾克婚禮も濟んだから梅ケ枝も大層喜び左衛門も婿源之助が非人に稀なる男振りと云ひ氣量でありますゆへ大に喜びました　座います此叙もと〳〵宜しくない奴で既に夫左衛門の目を掠めて當時演野家に滯在して居る大仁坊といふのに密通しドウも梅ケ枝が邪魔になつて仕様がない處へ又々婿が一人出來て見れば猶更ら自分には目の上の瘤だ　聲「之りやア事そ大仁さんに相談

して二人の者を亡き者にして呉れん」と飛んだ悪心を起し密々に相談して二人の者夫婦を害しやうとした、スルと此事を妹の櫻木が立聞きをして何か此事を姉夫婦に知らせたいと思ふが好き折がない……イヨ〳〵毒害しやうといふ朝になつたからサア櫻木は氣が氣じやアない姉の前へ先きへ膳部を運び源之助の方へは後で運んだものですから梅ケ枝は不思議に思つたッ、すると不思議なる故一室隔てたる所に飼置きたる鶯の唐琴が實に物悲しげに法……法華經と囀つた梅ケ枝は益々不思議に思つて居ると後から運んだ源之助に備へべき膳部を態と物に躓いた振をしてパッタリ其處へ落して引覆かへして仕舞つた、樣子如何にと覗ひたる繼母のお靜はハッと思つたがモー間に合はない　聲「マア何といふ疎々かしい娘だらう氣を付けるが宜いぢやアないかと云ふ間に疊の色がサッと變つちまつたッーコーして居る内に樣

側に寢て居つた黒猫が突然飛んで來て汁を舐めたり肴をムシャ〳〵喰ひ散した　靜「サヤ此畜生ッ……」と云ひたがモー間に合はない猫はタル〳〵と其處へ二三遍廻つて血を吐いて死んで仕舞つた源之助は　源「扨あそ之は正しく毒藥の調合に相違ない此間中よゞ樣子を見る所が何も我々夫婦に辛く當り出て行けよがしの取扱ひ之りやア斯して居ると必ず碌なことはない生命を取られる樣な事が出体するだらうと斯う考へましたから二三日經て梅ケ枝を呼び　源「何を隱そう俺は非人にころなつて居たが根からの袖乞ではない實は由ある武士の種で父と母との仇を討んが爲めに姿を非人に換へて居たが一昨日の朝の那の始末ではイツ何時毒害される事のあいとも限らないソンな事で大望を懷いて居る身体を空しく亡ぼしてはならんからして暫らくの間此處を立退き躬れ本望を遂げた上で再び夫婦とならうと說き諭した梅

ケ枝は別れが實に悲しう涙塵いまするが左樣明されて見りやアこの無理に止る譯にも往ないソコで夫の言葉に從ひ暫らく別れる事になつたがサア別れて見ると元々懇捌をした位の惚れた男であるから堪らない案じ暮して家を蒐出して源之助の跡を慕ふといふ始末に相成りましたが此事を物影にて密に垣間見たる母のお靜は時ゐそ來たれりと大仁坊に此事を咄したもんだから大仁坊も大に喜び何か相談の上で之又梅ケ枝の跡を追ふといふ梅ケ枝殺害の件り……

第八席

大仁坊は梅ケ枝の跡を追懸けたといふのは素より邪魔物になつて仕樣がないから寧ろ家出をしたを幸ひ途中で殺して仕舞へば跡腹を病めずに濟ひと考へたるゆへッコーで追懸けて參つたが丁

度二里足らずも參りますと一ッの辻堂がある先きへ廻つて大仁坊屹度此處を通るだらうと思つたので人里は離れて居るし幸ひの場所と煙草をプカリ〳〵と燻らして居ると案の定梅ヶ枝は女の足の捗取らずトボ〳〵と參つた　大仁「オイ〳〵姉やチッと待つて呉んねい……梅ヶ枝はギョッとしましたが振返つて見ると大仁坊だ……厭な奴に逢つたと思つたが　梅「ヲヤ大仁さん何して此處へ　大仁「大仁さんもねいもんだ俺ァお前の命を貰ひに來たんだ夫れで最先より茲に待受けて居る處サ　梅「ヒエー何にイ……命を貰うと何ぞ夫ばかりは勘辨なすつて下さいまし　大仁「イヤ勘辨は出來ねいと突然辻堂の樣から飛下りさま拔く手も見せず切り付けた　梅「アレーヒ……人殺し……と逃け廻るを無慘にも髻を捉んでグイと引き寄せ束も通れッと突込んだり梅ヶ枝はサモ苦しげに眼を見張り　梅「俺れ大仁能くも〳〵妾を殺し

たナ恨みも何もないものを慘酷しい殺といふは何事だサア此怨を報ひさに濟むと思ふか覺ゑて居ろとハッタと睨んだ其物凄さ此時數影よりして法華經と一聲鳴いたは之れ唐琴の音色である ホッと一息梅ヶ枝はニッコリ笑うかと思ふと唐琴は左も悲しげに幾聲か泣き連れ何所ともなく飛び去つたり大仁坊も不思議な事に思つたなれど最早息の根も絶ゑた事故一刀の血をぬぐひ人の來ぬ間にと姿を隱しましたお咄し變つて源之助は梅ヶ枝に別れ何處を宛と云ふでもあるません事故之より海道筋を志し鎌倉を指して發足致しましたが丁度箱根へと差し懸つた今では箱根山と云つても滊車で參ればヨー此處が箱根かと云ふ位て何も困難は感じませんですが昔しはナカ〳〵其樣譯じやアない箱根八里といつて實に難義でも座います……此峠へ差し懸つたのが源之助だ所が何處を何して道を取違へたものですか往けば往くだ

け山奥へ踏込んで道らしい道がないスルト其内に日はパッタリ暮れて仕舞ひモー如何とも仕方がない據ところありませんゆへ樹の根方に腰を懸け腰なる煙石を取出して煙艸を燻らして居ると遙か向ふに火影がチラ〳〵と見ゑます　源「扨は近き所に人家ありと覺ねたり……と再び勇氣を振つて火影を宛に往つて見ると人家がある所が段々山深く道入つて往つた　源「モシ〳〵ドン〳〵……ドン〳〵　男「ヲー誰れか來た樣だコレ重三郎戸を明けて見て上げるが宜い大方之りやア道に迷つて來たに相違なかろうから……　重「畏りました　立つて戸口へ參り重「何誰……　源「ハイ道に迷ひました旅の者何か一夜の宿を願ひたい　重「夫は嘸お困りならんと戸を開けて内へ入れ源之助も挨拶して主人の側へ參つた主人といふのは慾髮でモー五十余六十近くの老人です　老「アヽお若いお方の道に迷つて嘸お困りでし

やう大方武術の修業では座らうナ　源「如何にも左樣では座います……シテ先生には矢張り武藝をお嗜みで　老「イヤ〳〵俺は武藝の方とやアない人命を助ける醫道を修める者じや　源「ハヽア左樣で座いますか……と其晩は四方山の物語りを致しました扨て臥りました扨翌る日になりますと源之助は早くより起出で弟子の重三郎を手傳つて朝飯の支度をいたした　重「お客さま貴君は武者修行をなさると仰しやいますが何うも何藝でも修行となつては六ヶ敷ものでは座いますねい　源「左樣々々其道で秀でやうとなつたら何でも困難で座います……時に此方の先生は何と云ふお名前で座いますか　重「先生は洞仙といつて何か醫術を御發明なさると仰しやつてアヽして此山奥に引籠つて居りますが素は加賀國の藩士で佐々木源太左衛門と仰しやつた方で座います　源「エヽ何加賀の佐々木源太左衛門……道理で能く觀

た人もあつたもんで左の目尻に大きな黒子が二ッある年恰好と云ひ人相といひ……重「何と仰しやいます　源「イヤ何此方の事だ……と躰よく其場は濟ませたが此處で逢ふとは百年目と、大に喜び其内に三人の主客打揃ふて朝飯を濟ませたが　源「時に彼主人昨夜は飛んだ厄介になりまして誠に有難い仕合せで彼座います處で一ッ伺ひたいのは彼主人は素佐々木源太左衛門と仰しやりは致しませんか」洞「仙は不思議に思つたが余り突然の問であつた故　源「若い折は左様ヤしたとッイロが出て仕舞つた　源「然らば加賀の國の住人で　洞「如何にも……　源「扨は珍らしや加賀の佐々木源太左衛門吾れこそ汝の爲めに大井川々留の節殺害せられたる河内の佐々木源太左衛門の一子源之助……サア尋常に勝負いたせ」源「太左衛門は驚いたの驚かないの正逆に此樣山奥に居れば何の仇討なぞはなからうと思つて居た所案外にも此始末と暫し無言で居たがグズ〳〵して居れば源之助に斬り付けられるから兼て用意の一刀を拔き放ち　洞「如何にも其方の云ふ通と大井川にて佐々木源太左衛門に遺恨を以て殺害致したに相違ないが仇討とはおこがましい返り討に致して呉れん覺悟致せと外面へ飛び出した源之助も續いて外へ飛び出したが此勝負は次席のお樂しみにいたします

第九席

外面へ二人とも飛び出したがナニシロ片方は孝子の一心片方は老ひたる毛錄だから忽ち一刀の下に斬殺されたケレども別に弟子抔には遺恨はないゆへ重三郎にも他れの仇なる越きを語り悠々と箱根を下山に及んだが之で父の仇は討つたなれど母の仇は未だ討つ事が出來ないソコで再び河内國へ取つて返し密かに源

吾の挙動を見る處が今では佐々木家を横領して昔しよりも一層繁昌に暮らして居る　源「俺れ源吾奴悪い事を致すな……」と之より其跡を附け廻して居た處が源吾はッンな事は何時のか間に忘れて仕舞つて更らに源之助の事抔は思はない夫れ故賊に油断があるデ或日村の法事に招かれて夜に至つて帰つて來た源之助は此事を伺ひ知り途中に待伏せを致して居り今や來ると身拵へたり源吾は微酔でブラ〳〵と道つて來ると　源「佐々木源吾暫ら待て　源吾「誰だ……だ……誰だ……　源「忘れもしねい三年跡淀川堤で克くも母を殺害し剰さへ系圖の一巻を奪ひ立去つたなサア佐々木源太左衛門の一子源之助なり覚悟に及べと切り込んだ源吾はハッと思つたが斯うなりやア仕方がない　源吾「如何に楯を殺したナア俺の業に違ひはねいが生意氣にも仇呼ばはり佐々木の家は伊領主の石川様から拝領したんだ夫れゲズ〳〵抜か

すからにやア返と討に致して呉れる」と之又一刀を引き抜いて酔ふては居れど本性違はず一上一下と切り結ぶ源之助焦つて打込む一刀源吾はガッキと受留めたが力餘つて眉間へ深く切り込まれた故血汐が眼へ道入つて働きも自由ならぬ其處を付け入る源之助肩先き深く斬り付けたからモー堪らない源吾はバッタリ其場へ仆れたノシ懸つて留めを刺し母の位牌へ手向けつゝ両親の仇を討つて本望を遂したが折節石川典膳は鎌倉の不首尾にて伊役御免となり後任に淀屋惣右衛門と云ふのが河内の領主となつた故源之助は之れ迄の事情を悉く訴へ出で明斷を仰ひて黒白も相分つたから再び佐々木家再興する事に相成り家の系圖も手に這入りましたッコで一先づ攝州長柄へ參り淀野の長者を尋ねて見た處豈圖らんや柳ケ枝は大仁坊の爲めに殺され其事何に紛れ母のお静は大仁坊と共に欠落して仕舞ひ夫れや此れやを苦に病んで主

人左衛門も病死いたし殘るは妹娘の櫻木と桜山作左衛門ばかり流石の大家も僅かの内に微碌して仕舞はうとしたので源之助も大に驚き　源夫に付けても梅ヶ枝は跡を慕つて家出をなし其途すがら大仁坊の爲めに殺されたと云つては如何にも不憐千萬と涙を瞬きましたけれども之も又定まる運命據ぜみろ淫座いませんと一晩佛間に籠つて通夜を致した處が唐琴はイツの間にか佛間へ飛來り法々華經と一聲悲しげに鳴くかと思ふとバッタリ其儘へ舞ひ落ち其儘死んで仕舞つた不思議に思つた源之助　源全く之は梅ヶ枝の亡靈が乘り移つて居たかも知れないとソコで梅ヶ枝の墓へ此鶯を葬り後怨に吊つて遣つた之れが後に鶯塚となつて人口に膾炙致すやうに相成つたのである源之助は之より作左衛門の勧めに依つて妹の櫻木を嫁りて妻と致し長柄の長者の跡は當分源之助が後見となつて作左衛門が賄なひを致し源之助

櫻木の間にもうけたる一子を擧げて濱野の跡目といたした夫れ故後に至る迄兩家共相並んで繁昌し再び花咲く春に逢ひ其時の困難も昔し語りと相成つたと云ふ鶯塚仇討美譚も之にて大尾と致します……

鶯塚仇討美譚　畢

明治三十二年十二月十日印刷
明治三十二年十二月十六日發行

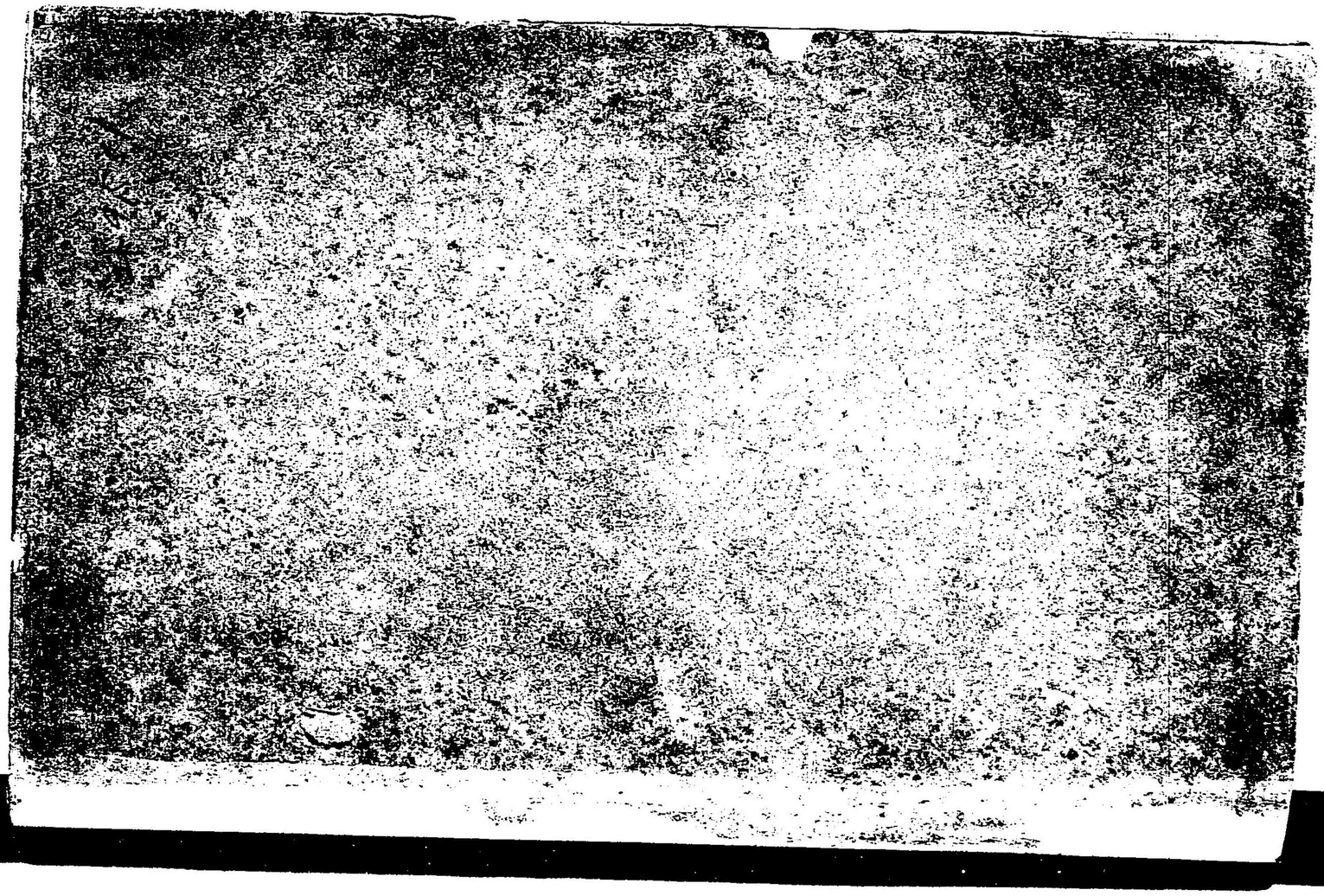
編輯兼發行者　東京市淺草區瓦町十二番地　山崎曉三郎

印刷者　東京市神田區南乘物町十五番地　大塲沃美

印刷所　東京市神田區南乘物町十五番地　龍雲堂

發行所　東京市淺草區瓦町十二番地　國華堂書店

不許復製



特 8
113

097483-000-2

特8－113

日本仇討全集

柴田　南玉／口演

M32
DBS－1393